

一般社団法人 日本土壌肥料学会 2023 年度通常総会
議 事

第 1 号議案 2022 年度事業報告、事業報告の附属明細書、
収支決算報告および監査報告

I. 2022 年度事業報告（令和 4 年 3 月 1 日～令和 5 年 2 月 28 日）

2022 年度は、2020、2021 年度に続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が事業の遂行に影響するなか、通常総会、「土と肥料」の講演会、年次大会は 3 年ぶりに対面開催を行い、若手海外渡航支援や、国際会議等への代表者派遣も再開された。また、理事会、各種委員会も一部対面開催を行いつつ、オンライン開催を併用した対応となった。支部大会は、4 支部で対面開催、2 支部でオンライン開催となった。

定期刊行物では、会誌は計画通り刊行されたが、原著論文の投稿数の減少があり、投稿呼びかけとともに講座企画の拡充などを図った。欧文誌は前年度の刊行遅れは解消されたが、投稿数は減少傾向である。

若手会員の育成・支援のため、第 22 回 WCSS および第 15 回 ESAFS における発表のための渡航費または参加登録費の支援経費を拡充した。また、理事会において、2022 年度と同様に学生会員の 2023 年度会費を免ずる措置を決めた。

2027 年の学会設立 100 周年に向けて、記念事業の準備委員会において企画を検討し、一部は理事会承認を経て取組を開始した。

1. 定期刊行物および資料の刊行

1) 定期刊行物

- (1) 日本土壌肥料学雑誌（会誌）は、第 93 巻第 2 号～第 6 号および第 94 巻第 1 号の計 6 冊を刊行した。掲載した論文数は次の通りである。報文 12 編、ノート 6 編、技術レポート 5 編、講座 14 編、総説 1 編、資料・国内外情報等 19 編、ニュース、書評、欧文誌掲載論文要旨、合計 458 頁、ほかに会員消息、会誌投稿規程、原稿執筆規程、編集委員会だより、学会だより（土壌教育活動だよりを含む）等を掲載した。
- (2) SOIL SCIENCE AND PLANT NUTRITION（欧文誌）のオンライン上での刊行は Vol.68, No.1～No.6（No.5、6 合併号）および Vol.69, No.1 の計 6 冊となり、掲載した論文数は、通常論文 35 編、特集セクション 30 編、レビュー 3 編、会誌掲載論文要旨、合計 647 頁である。
- (3) 日本土壌肥料学会講演要旨集（第 68 集、213 頁）を 2022 年度東京大会（9/13～15）に際し、電子媒体として刊行した。

2) その他の刊行物

なし。

2. 講演会および研究会等の開催、支援

1) 「土と肥料」の講演会

2022 年 5 月 21 日の通常総会後に対面開催した。テーマは『「みどりの食料システム戦略」を見据えた土壌肥料のアプローチ：有機質資源の利用の視点から』、講演者と演題は、浅野

智孝氏（朝日アグリア株式会社）による「堆肥原料の肥料化」および古賀伸久氏（農研機構九州沖縄農業研究センター）による「有機農業や減化学肥料栽培に貢献する有機質資材窒素肥効見える化の取り組み」である。本講演会は日本学術会議の後援を受けて実施し、73名の参加者があった。講演会後には、講演要旨および講演スライドのファイルを学会 HP に掲載し、閲覧を可能にした。

2) 主催シンポジウムの動画公開

2021年11月5日に開催したシンポジウム「原発事故から10年～これまで・今・これからの農業現場を考える～」の内容を再集録し Youtube に公開(4/11)するとともに学会 HP のトップページにバナーを掲載した。2023年2月末までの視聴回数は延べ1,200回余りであった。

3) 2022年度年次大会

- (1) 2022年度東京大会は、東京農業大学世田谷キャンパスを会場として9/13～15に3年ぶりに対面開催を行った。参加者数は事前登録593名（正会員402名、学生会員148名、非会員43名）および当日登録99名（正会員34名、学生会員47名、非会員47名、東京農業大学生17名）の合計692名（正会員436名、学生会員195名、非会員90名、東京農業大学生17名）であった。なお、参加登録費、研究発表費に加えて、延べ30社（バナー広告5社、プログラム集広告5社、企業展示16社、寄付4社）の協賛、助成金（東京農業大学）をいただいた。
- (2) 一般講演の演題登録数は355題（口頭発表204題、ポスター発表151題）で、発表取り下げが4題（口頭発表2題、ポスター発表2題）あった。一般講演演題から、若手口頭発表優秀賞8題、若手ポスター発表優秀賞8題を選考し、表彰した。
- (3) シンポジウムは、公開シンポジウムを含めて4つのテーマのシンポジウムおよびミニシンポジウムを開催した（9/15）。
 - ・全部門：地球温暖化に対処する土壌肥料学（公開シンポジウム）
 - ・9,2,5,6,8部門：自分事として土をとらえる感性を育むために～「土壌教育はなぜ必要なのか」を考える～
 - ・2,7,8部門：農耕地土壌におけるプラスチック問題の解決をめざして
 - ・6,8部門：みどりの食料システム戦略の時代に土づくりをどう伝えるか
 - ・ミニシンポジウム「若手研究者が魅せる土壌肥料研究の最前線」
- (4) 高校生による研究発表会は、約40名の高校生による20課題（17校、ポスター掲示のみの発表6校7課題を含む）の発表があり、最優秀ポスター賞2課題および優秀ポスター賞3課題を表彰した（9/13）。なお、発表会参加の4校へ交通費補助を行った。
- (5) 学会賞等授賞式は東京農業大学百周年記念講堂において開催した（9/14）。各賞受賞者および受賞業績は以下の通り。

第67回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・江沢辰広：アーバスキューラー菌根共生における物質輸送の分子基盤と環境応答
- ・舟川晋也：比較土壌生態学による土壌資源の持続的利用に関する研究
- ・牧野知之：土壌中における有害元素の動態と作物吸収低減に関する研究

第27回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・鈴木伸郎：植物 RI イメージング技術の開拓と植物栄養学研究への展開

第40回日本土壌肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・伊藤英臣：農耕地の窒素循環と農業害虫に関わる土壌微生物の研究
- ・内田義崇：農耕地土壌における窒素動態の解析と N₂O 発生削減技術の開発に向けた分野融合的研究
- ・木下林太郎：土壌の地理的空間変動解析による肥沃度改善への貢献

・丸山隼人：植物の土壌中難利用性リン獲得機構に関する研究

・山崎清志：圃場観察に基づいた根の栄養屈性の発見

第 11 回日本土壌肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

・櫻井道彦：有機栽培畑における実践的な土づくりと養分供給技術の開発

第 11 回日本土壌肥料学会貢献賞

・瀧 勝俊：中部支部における土壌教育活動の実施体制の整備と長年にわたる運営および実践

日本土壌肥料学雑誌論文賞の受賞者と受賞論文題目

・高橋智紀、西田瑞彦、浪川茉莉：原位置において簡易に測定できるガス拡散係数測定装置
日本土壌肥料学雑誌 第 92 巻第 1 号 11~18 (2021)

・人見良実、吉泉裕基、亀和田國彦：埋設型ライシメータ利用による黒ボク土畑での牛糞堆肥連用が窒素動態に及ぼす影響評価 日本土壌肥料学雑誌第 91 巻第 4 号 217~227 (2020)

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

・Fan Wang, Reiko N. Itai, Tomoko Nozoye, Takanori Kobayashi, Naoko K. Nishizawa, Hiromi Nakanishi : The bHLH protein OsIRO3 is critical for plant survival and iron (Fe) homeostasis in rice (*Oryza sativa* L.) under Fe-deficient conditions
Soil Sci. Plant Nutr., 66(4), 579-592 (2020)

(6) 日本土壌肥料学会賞、同技術賞、同奨励賞、同技術奨励賞、同貢献賞、日本農学賞・読売農学賞の受賞者による記念講演を授賞式に引き続き行った。

日本土壌肥料学会賞、同技術賞、同奨励賞、同技術奨励賞、同貢献賞の受賞者と受賞業績

・(4) に記載の通り。

2022 (令和 4) 年度日本農学賞・読売農学賞受賞者と受賞業績

・小崎 隆：土壌情報システムの基盤構築とその応用による土壌の劣化防止と修復に関する研究

(7) 日本土壌肥料学雑誌論文賞および SSPN Award 受賞論文については、受賞記念ポスターをポスター発表会場に掲示した。

(8) 土壌モノリス展示を東京大会開催期間中 (9/13~15) に東京農業大学「食と農」の博物館で開催した。日本の代表的な土壌 7 種類 9 本の土壌モノリスが展示と解説が行われ、3 日間で 196 名 (会員 127 名、一般 56 名、スタッフ 13 名) の来場者があった。本展示は、学会第 9 部門の企画提案を受けて予算措置を行い、学会委員有志からなる土壌モノリス展示運営委員会により運営された。その詳細は会誌 94 巻 2 号に掲載した。

(9) 会員有志による「土壌肥料若手の会 2022in 東京」が大会初日 (9/13) に開催された。今回は、コロナ禍などにより若手研究者の海外での研究機会が著しく減少していることから、海外で研究を行っている日本人若手研究者の磯部一夫博士 (北京大学副教授)、藤田智史博士 (フランス国立科学研究機構研究員) を講師として大会会場とオンラインでつなぎ、研究内容や研究環境等について交流を深めた。全国 15 大学、農研機構、公設試験機関等から 31 名の参加があり、その詳細は、会誌 94 巻 1 号に掲載した。

(10) COVID-19 の動向に配慮し、懇親会は中止となった。

4) 支部大会

・北海道支部：2022 年度秋季支部大会を対面開催し (12/1、かでの 2・7、札幌市)、78 名が参加した。研究発表会では 20 題の口頭発表が行われ、優秀発表賞を 2 課題に授与した。シンポジウム「日本は肥料を持続的に利用できるのか？」を開催し (11/5 オンライン)、126 名がライブ視聴した。

- ・東北支部：2022年度支部大会を対面開催した（7/8、山形テルサ、山形市）。企画講演「肥料高騰下において土壌肥料研究の果たす役割」2講演、記念講演「土壌中における有害元素の動態と作物吸収低減に関する研究」1題、一般講演6題、ポスター発表10題が行われ、参加者は40名であった。
- ・関東支部：2022年度支部茨城大会を対面開催し（11/20、ザ・ヒロサワ・シティ会館、水戸市）、特別講演「窒素問題：窒素利用の便益と窒素汚染の脅威のトレードオフ」1講演、一般講演31題（口頭発表5題、ポスター発表26題）および高校生による研究発表5題が行われ、参加者は77名であった。
- ・中部支部：2022年度支部研究会・中部土壌肥料協議会第102回例会を対面開催し（11/14～15、ウインクあいち、名古屋市）、特別講演「有機農業、有機農産物、有機物利用を考える」3題、一般講演20題が行われ、参加者は76名であった。
- ・関西支部：2022年度講演会・関西土壌肥料協議会シンポジウムをオンライン開催し（11/28～12/2）、一般講演22題（口頭発表13題、ポスター発表9題）、関西土壌肥料協議会シンポジウム「バイオ炭施用とj-クレジット」4題が行われ、67名の参加があった。
- ・九州支部：2022年度支部例会をオンライン開催（10/19～20）し、一般講演18題、支部学術賞受賞講演が行われ、44名の参加があった。

3. 研究の奨励および研究業績の表彰

2022年10月21日に選考委員会を開催し、2023年度日本農学賞の推薦候補者、第68回日本土壌肥料学会賞、第28回同技術賞、第41回同奨励賞、第12回同技術奨励賞、第12回同貢献賞、日本土壌肥料学雑誌論文賞およびSSPN Awardの受賞者を審査し選定した。選考結果は理事会承認を経て確定した。各賞の受賞者および受賞業績は以下の通り。

第68回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・秋山博子：農耕地における温室効果ガス発生削減に関する研究
- ・唐澤敏彦：緑肥の総合的土壌改善機能の評価とその利用に関する研究
- ・山口紀子：土壌中元素の分子スケールスペシエーション

第28回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・大森誉紀：西南暖地における環境調和型施肥・土壌管理技術の開発と普及
- ・中辻敏朗：農耕地の生産環境評価のための手法開発とその活用

第41回日本土壌肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・安藤 薫：最新技術を取り入れた土壌養分可給性の評価に基づく持続的肥培管理法の提案
- ・黄 勝：イネのミネラル輸送体の機能解明
- ・時澤睦朋：高精度転写制御配列予測によるSTOP1が制御するアルミニウム耐性遺伝子発現に関する研究
- ・増田曜子：水田土壌における窒素および炭素循環を駆動する新規微生物群の発見と応用
- ・森下瑞貴：土壌の空間評価・生成分類に関するデータ集約型研究

第12回日本土壌肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

- ・八木哲生：北海道における飼料用トウモロコシの省資源・環境保全的施肥法に関する研究

第12回日本土壌肥料学会貢献賞受賞者と受賞業績

- ・安西徹郎：部門・部会制度の創設、技術賞・技術奨励賞の新設等に関与し学会の活性化と発展に貢献

日本土壌肥料学雑誌論文賞受賞者と受賞論文題目

- ・糟谷真宏、安藤 薫、尾賀俊哉、大橋祥範、久野智香子：愛知県での95年間の長期連用試験における水稲の収量と土壌化学性の変化および土壌カリウム供給機構について 日本

土壌肥科学雑誌 第93巻第1号 1~11 (2022)

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

- ・Hinako Sugiura、Soh Sugihara、Takehiro Kamiya、Maria Daniela Artigas Ramirez、Minori Miyatake、Toru Fujiwara、Ohyama Takuji、Takashi Motobayashi、Tadashi Yokoyama、Sonoko Dorothea Bellingrath-Kimura、Naoko Ohkama-Ohtsu : Sulfur application enhances secretion of organic acids by soybean roots and solubilization of phosphorus in rhizosphere Soil Sci. Plant Nutr., 67(4) 400-407 (2021)
- ・Atsushi Hayakawa、Yasunari Shiraiwa、Naoki Murakami、Yuki Murayama、Tomoko Ishida、Yuichi Ishikawa、Tadashi Takahashi : Influence of surface geology on phosphorus export in coastal forested headwater catchments in Akita, Japan Soil Sci. Plant Nutr., 67(3), 332-346 (2021)

4. 内外の研究者、技術者、他学会等との連絡および協力

1) 日本農学会関係

- ・2022年度日本農学会シンポジウム「カーボンニュートラルの達成にむけた農学研究」の開催に協力し、本学会より白戸康人会員（農研機構 農業環境研究部門）が「食料生産と気候変動緩和の一石二鳥 ～土壌は地球を救う！」を講演した（10/1）。
- ・2023年度日本農学会シンポジウムのテーマおよび話題提供の募集に対応した。

2) 日本学術会議関係

- ・IUSS次期役員に本学会会員5名がCommission vice chairに選出され、学会HPに掲載した（3/15）。
- ・土壌肥料学会2022年度東京大会初日に東京農業大学にて日本学術会議IUSS分科会とIUSS新役員および土肥学会役員との懇談会を行った（9/13）。
- ・日本学術会議が主催する講演会、研究会の開催案内等を学会HP、FBに掲載して会員へ情報提供した。
- ・「持続可能な発展のための国際基礎科学年（IYBSSD2022）」への「賛同」を学会として示す手続きを取ると共に、IYBSSD2022および2027年の日本土壌肥料学会の創立100周年に向けた記念事業の一環として日本学術会議農学委員会土壌科学分科会、農学委員会・食料科学委員会合同IUSS分科会との共同主催「食・土・肥料-SDGs達成のための基礎科学として」の開催を準備した。

3) 他学会等関係

- ・第34回環境工学連合講演会「環境工学の22世紀」（5/31、東京都、オンライン併用）を共催し、本学会の仁科一哉会員が「環境問題解決に向けた最先端の土壌肥料学分野と今後の展開」を講演した。
- ・第32回環境工学総合シンポジウム（7/7~8、高松市）を協賛した。
- ・第59回アイソトープ・放射線研究発表会（7/6~8オンライン）を協賛した。
- ・共催予定の2020年酸性雨国際会議（Acid Rain 2020、新潟）は再々延期（2023.4/17~21）となった。
- ・日本粘土学会第64回粘土科学討論会（9/7~8、松江市）を共催した。
- ・地盤技術フォーラム2022（9/14、東京都）を協賛した。
- ・土壌物理学学会大会第64回シンポジウム「不飽和帯-地下水間の水分・化学物質移動のモデル化：土壌物理学に求められるもの」（10/29、津市）を協賛した。
- ・日本腐植物質学会第38回講演会（11/25~26、船橋市）を協賛した。
- ・日本学術会議公開シンポジウム「『SDGs達成に向けた農芸化学の挑戦』第4回植物科学からサ

ステイナブルな農業生産・ものづくりへ」(10/29オンライン)を後援した。

4) IUSS、ESAFS 等関係

- ・ESAFSサポートオフィスを通じ、関連情報を発信した。
- ・第22回WCSS (7/31~8/1、グラスゴー)に代表者を派遣するとともに、若手会員の発表に対して参加登録費または渡航費の一部を支援し、その報告を会誌の国内外情報として掲載した。
- ・第15回ESAFS (8/22~26、クアラルンプール)に代表者を派遣し、その報告を会誌の国内外情報に掲載した。
- ・IUSS100周年に向けたIUSS genealogy documentationの作成のため、日本土壌肥料学会の歩みをまとめた資料を作成し日本学術会議IUSS分科会に提供した。
- ・IUSS名誉会員3名のインタビューがIUSS YouTube Channelに掲載された。

5) 定期刊行物の寄贈・交換

内外の研究機関に対して定期刊行物を寄贈・交換している。

- ・日本土壌肥料学雑誌 国内 9、国外 12
- ・Soil Science and Plant Nutrition 国内 5、国外 16

5. 本学会の委員会等活動

1) 企画委員会

- ・2023年度総会後に開催する「土と肥料」の講演会を企画した。

2) 財政基盤整備委員会

- ・拡大財政基盤整備委員会を開催し、学生会員の会費および本学会における収益事業と法人税について、現状の課題と対応方策等を検討した(8/27オンライン)。
- ・財政基盤整備委員会における学会の方向性等検討ワーキンググループを開催して財政状況の推移と見通しおよび今後取り組むべき課題に関する整理と検討を行い、会員サービスの向上・収入増につながる取組みについて検討した(12/6オンライン)。検討結果を踏まえて実現可能なものは実施に向けて理事会へ提案した。

3) 土壌教育委員会

- ・土壌教育委員会をオンラインで開催し(6/25)、昨年度の事業報告および2022年度の事業と予算の確認、東京大会における「高校生による研究発表会」の準備状況の確認、動画作成をはじめとする土壌教育教材の開発、土壌教育の国際ガイドラインに関する検討、土壌教育委員会HPの更新等を行った。
- ・東京大会において「高校生による研究発表会」を大会1日目(9/13)に開催(17校20課題)した。
- ・委員による教育活動(体験教室「泥だんごづくり」(4/16、寄居町)、「土の足ざわりを楽しもう」(5/3~4、狭山市)、土壌モノリスの展示(5/4~6/8、7/24~8/30、11/14~1/8、寄居町)、「泥染めに挑戦」(6/18、寄居町)、「落ち葉めぐり」(10/15、寄居町)、ワークショップ「土の中の生き物」(7/17、寄居町)、「火山の噴火でできた土ってどんな土」(7/24、寄居町)、「土でアート作品づくり」(12/3、寄居町)、出前授業(5/10、5/21、6/6、6/13、7/25~7/29、8/26、8/27)、講習会講師「日本の土壌とワインづくり」(7/9、東御市)、モノリス解説動画の配信(12/5))を行い、それらの概要は「土壌教育活動だより」として会誌に掲載した。

4) 広報対応

- ・会誌の会告およびニュース、学会ホームページ(HP)、フェイスブック(FB)、メーリングリスト(ML)によって、学会の活動概要、各種募集情報、シンポジウム等イベント情報、年次大会・支部会開催情報等を発信した。

- ・学会 HP に「土と肥料」の講演会概要等の記事および講演要旨等を掲載した。
- ・土壌肥料学会 2022 東京大会にて、「土壌モノリス展示」開催に向けて大会運営委員会等との調整を行った。
- ・「エコプロ 2022」（12/7～9）への出展を行った。

5) 国際土壌の 10 年関連活動

- ・IUSS、ESAFS を中心に代表者派遣、委員等の推薦、国際会議等に係る情報収集と発信を継続した。
- ・ISMOM2024（2024.10、つくば市）の共催と開催支援を採択した（5/28）。
- ・日本ペドロロジー学会による第 7 回国際土壌分類会議（ISCC2024、2024.6 予定、帯広市）の日本招致への協力および共催を採択した（5/28）。

6) 男女共同参画学協会連絡会への対応

- ・女子中高生夏の学校 2022（8/7～8 オンライン）に参加し、ポスター展示を行った。

6. 会務報告

1) 会員の動向

(1) 2023 年 2 月末日における会員数は次のとおりである。

正会員 1,571 名（うち会費免除正会員 69 名、外国正会員 14 名）、賛助会員 36 社、名誉会員 10 名、学生会員 319 名（うち留学生 67 名）、国内団体購読会員等 115 団体
合計 2,051 名・団体

(2) 2022 年 2 月末日までの入退会者数（種別変更を含む）は次のとおりである。

入会：正会員 80 名（うち会費免除会員 10 名、外国正会員 2 名）、学生会員 126 名（うち留学生 15 名）、賛助会員 1 社、団体会員 1 団体
合計 208 名・団体

退会：正会員 125 名（うち会費免除会員 5 名、外国正会員 4 名）、学生会員 103 名（うち留学生 20 名）、名誉会員 1 名、賛助会員 2 社、国内団体購読会員 5 団体
合計 236 名・団体

2) 会議

(1) 総会：2022 年 5 月 21 日、東京大学農学部 3 号館 4 階大会議室（東京都文京区弥生 1 丁目 1）において第 45 回通常総会を開催した。代議員総数 100 名のうち出席代議員数 93 名（内訳：本人出席 13 名、委任状出席 80 名）で総会は成立した。大友 量氏を議長に選任し、第 1 号議案 2021 年度事業報告、収支決算報告および監査報告について、担当理事から総会資料により 2021 年度事業報告および収支決算報告が行われた。また、監事より監査報告があった。これらについて慎重に審議した結果、原案通り承認された。

第 2 号議案 2022 年度事業計画および収支予算案について、担当理事から 2022 年度事業計画および収支予算案について、総会資料により説明された。これらについて慎重に審議した結果、原案通り承認された。

第 3 号議案について、総会議事録署名人として、議長のほか、相崎万裕美理事・大津(大鎌)直子理事が選任された。総会議事録は 2022 年度第 1 回理事会（5/28）で承認され、一連の経過を会誌第 93 巻 4 号に掲載した。

(2) 理事会：理事会は 6 回（3/26、5/28、7/23、10/22、12/17、2023.1/21）をオンライン、対面、対面とオンラインの併用で開催し、所要の事項・会務を報告・審議し、その議事録を会誌のニュース欄に掲載した。主要な議題としては、年次大会の開催方法と学会賞等授賞式並びに記念講演等の計画、会誌および欧文誌の企画・投稿・編集・刊行の状況と課題への対応、広報・土壌教育委員会・部門長会議の諸活動、他学協会・機関とのイベント等の共催・後援・協賛、若手会員の育成・支援、外部顕彰への推薦対応、会員の入退会等の承認等について審

議した。

2027年の学会創立100周年へ向けて理事13名からなる準備委員会を設置し、具体的な事業計画の検討を行った。その経過・提案事項は理事会において報告・審議され、ロゴマークの募集、記念シンポジウムの募集など一部の取り組みを開始した。

総会での代議員からの要望への対応を含む財政基盤整備委員会の検討経過を踏まえ、学生会員の2023年度会費免除、若手会員の国際会議発表渡航費・登録費支援の拡充、賛助会員への会員サービスの拡充を決めた。

また、改正個人情報保護法に対応して学会プライバシーポリシーの改定を行った。

(3) 部門長会議：3回の会議（4/1～4/6 メール会議、6/13～24 メール会議、11/6 オンライン）を開催し、東京大会におけるシンポジウムの公募に対する4件の企画案について検討し、いずれも採択した。対面開催となった東京大会一般講演のプログラム編成、若手ポスター発表優秀賞と若手口頭発表優秀賞の選考方法、副部門長の交代、2027年の学会創立100周年に向けたシンポジウム企画について検討した。2023年環境工学連合講演会講演者候補を選出し、講演会事務局へ推薦した。

(4) 2022年度学会賞等選考委員会：学会事務所において会長を議長として開催し、2023（令和5）年度日本農学賞の推薦候補者、第68回日本土壌肥料学会賞、第28回同技術賞、第41回同奨励賞、第12回同技術奨励賞、第12回同貢献賞の受賞者を選考した（10/21）。その結果は第3回理事会（10/22）での承認を経て、会誌93巻第6号に掲載した。

また、10/21午前、学会事務所において、論文賞等選考委員会を開催し、日本土壌肥料学雑誌論文賞受賞論文とSSPN Award受賞論文を選考した。その結果も第3回理事会での承認を経て、会誌93巻第6号に掲載した。

(5) 会誌編集関係：5回の常任編集委員会（4/6 オンライン、8/8 オンライン、10/3～11 メール会議、11/16～24 メール会議、3/15～22 メール会議）、1回の拡大編集委員会（9/14、対面）および1回の地域編集委員会（3/17～24 メール会議）を開催し、論文投稿・審査状況および審査システムの確認、技術レポート執筆計画、誌面活性化等に関して協議した。論文の審査、会誌の編集・発刊は順調であるが、投稿論文数が減少している。2022年度は、第93巻第2号～第94巻第1号までを刊行してJ-STAGEに掲載した。

(6) 欧文誌編集関係：編集委員会（5/26 オンライン）を開催し、Journal Editorial Officeの導入および欧文誌常任編集委員会の設置の審議、SSPNの投稿・編集・出版状況、編集委員の交代、特集セクションの状況、刊行の遅れ、Editorial Office体制の課題などの検討が行われた。SSPNのIFが2.389（2020）から1.929（2021）に下降した。2022年度は、SSPNのVol.68, No.1～No.6、Vol.69, No.1を刊行した。

(7) 支部における会議

北海道支部：2回の支部評議員会（6/10～16、10/25～31）をメール会議として開催した。

支部総会（12/1かでの2・7、札幌市）は対面開催して54名が参加し、2021年度事業報告、決算報告および会計監査報告、2022年度事業計画および予算案、2023年度事業計画および予算案、2023・2024年度役員案を承認した。また、第23回野外巡検を開催し（8/9 芽室町）、24名が参加した。

東北支部：支部役員会および支部総会（7/8 山形市）において、2021年度事業報告および会計報告、2022年度事業計画および予算案、2023年度事業計画および予算案、2022・2023年度支部役員を承認した。総会の参加者は20名であった。

関東支部：支部幹事会および支部総会（11/20、ザ・ヒロサワ・シティ会館、水戸市）を対面開催して77名が参加し、2021年度事業報告、決算報告および会計監査報告、2022年度事業計画および予算案、2023年度支部長・監事、事業計画および予算案を承認した。

中部支部：170回支部評議員会（6/1 オンライン）、第171回評議員会および支部総会（11/14

名古屋市)を開催し、総会において2021年度決算・監査報告、2022年度事業報告および決算報告、2023年度事業計画および予算案、2022・2023年度支部役員・評議員を承認した。支部総会は中部土壌肥料協議会と合同開催し、協議会の第102回例会開催案を承認した。総会の参加者は76名であった。また、土壌環境教育活動(7/17豊田市自然観察の森、8/19豊田市自然観察の森・岡崎北高校)を行い63名の参加者があった。

関西支部：支部および関西土壌肥料協議会の合同役員会を開催し(12/2オンライン)、2021年度事業報告および決算・監査報告、2022年度役員および事業報告、2023年度事業計画および予算案を承認した。

九州支部：支部常議員会(10/19)、支部総会(10/20)をオンライン開催し、総会において2021年度事業報告、決算報告および監査報告、2022年度事業計画および予算案、2023年度事業計画および予算案を承認した。総会の参加者は31名であった。

(8) 支部長連絡会：支部・本部間、支部間の連携を深めるために2022年度東京大会1日目に対面開催した(9/13)。各支部の活動報告と計画、支部における会計処理に関する留意事項、学会設立100周年事業における支部連携シンポジウムなどについて情報共有および意見交換を行った。

3) その他

- ・若手会員の育成・支援のため、従来からの「若手会員の海外渡航費等支援」7件に加えて、第22回WCSS(7/31~8/1グラスゴー)および第15回ESAFS(8/22~26クアラルンプール)における発表を対象に、渡航費または参加登録費の一部として新たに8件を支援することとした。支援対象者による学会参加報告は会誌国内外情報に掲載した。
- ・2024年度年次大会は、平舘俊太郎氏(九州大学)を大会運営委員長とし、福岡市において開催することを理事会において承認した。
- ・外部顕彰について、当学会より推薦した内田義崇会員が2022年度(第21回)日本農学進歩賞を受賞した。受賞研究業績課題名は「農耕地からのN₂O発生削減技術の開発に向けた多面的アプローチ」である。

II. 2022(令和4)年度事業報告の附属明細書

事業報告の附属明細書として記載すべき事項はない。